

地域活性化という「遊び」②

京都市
福知山市 「みわ・ダッシュ村」から

山本晋也

問題を楽しく柔軟に解決する習慣が身につく
限界集落での暮らしと子育て

山あい日照短く湿度も多く
冬は寒いし山は荒れはて

動物いっぱい
いいこと言え

水がきれいなことと夏涼しいくらい
かなって

典型的な中山間地の限界集落。
そんな集落の一番奥に

一家そろって移住して
テレビもゲームも

電子レンジもなく
畑や田んぼしながらお風呂や暖房に

薪を使って暮らしてます！
なんて言う

山本さん家はいろいろこだわって
昔ながらの日本の暮らしを実践して

いる！！
みたいによく思われるのですが

本物の畑を耕す前に日本じゃない国
に暮らしたり

常識を覆してナンボという現代美術
という畑を耕していた僕の中には

古い新しいとか日本人とかそうじゃ
ないとかいった単純な物差しがあり

ません。

和食は簡単だし家族のみんなも好き
なので洋食よりよく食べますが

山本家の食事は
和洋中エスニック等ジャンル問わず

洋食器でのワンプレートが基本で
す。

美しい和食器や道具をそろえ
手入れなど時間をかけて面倒なこと

を日常として楽しもう！
という考え方で教育としても実践し

ていたことも少々あったのですが
一食で6人が食べると

あつという間にお皿が30枚
それにお箸やお鍋。

自分のことは自分でするというのが
基本ルールですが

子供はどーしても洗い忘れてしまっ
たので

結局洗いや物の負担は最終的にかーち
やんにいく↓疲れがたまる↓機嫌が

悪くなる↓親子ゲンカ&夫婦喧嘩が
起る↓みんなハッピーじゃなくな

るといような流れが生じてしまっ
ます。

問題が起こると無性に解決したくな
る僕は、解決策として食器洗浄機な

ど考えましたが、たかが6人家族に
そんなもの大げさすぎるしお金もか

かります。
そんなら単純に使うお皿減らしたら

ええやん！ということ
まずは取り皿なるものを廃止。

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかたわらオーガニックレストランを経営するも食材を種から作ってみたいとなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダッシュ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人々が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダッシュ村副村長。

お茶碗に直接おかずをのつけて食べるという方法を試してみました。子供はもちろん大人でもおかずをのせるとき落としてしまったり削減できるお皿がただか6枚だったりです。

これでは何の意味もありません。

美術家以外に飲食店を運営していた経験も持つ僕はいいことを思い出しました。
ワンチプレート!!



ワンプレートの盛り付けは子供の仕事でもあります



簡単な食事でも笑顔があればいいのです

ランチは単価が低いので無駄な経費を徹底的に省かねばなりません。当然皿洗いも最小限に抑えなければいけないという理由でランチのワンプレートが考案されたのは明白です。早速、お茶碗やめてワンプレートにしよう
別にダイナーの時間にランチ食べてもええやろと提案すると日本人としてお茶碗の持ち方くらい教えんとあかんのちゃう？と田舎育ちの家内からクレームがつかれました。
子供たちは日本人である前に

人間としてハッピーに暮らす権利があるし
そもそも日本がいつからあるのかというの、いろんな学説があつて大人もそんなことはつきりわからないし、昔の日本人がお茶碗を使つていたと言つても、それよりもっと昔の人は多分お皿しかなかったわけで、それよりもっとも昔の人は葉っぱやなんかの使い捨ての食器を使つていたのだから、そこまで考えると今環境に悪いとされる使い捨ても簡単に否定できないな
と僕が言い出す頃には家内も理解したのか、屁理屈を聞きたくなかったのかは不明ですが、それほど言うなら一度やってみようということになったのです。
しかし、このワンプレートいざ実践してみると
お茶碗いらぬ、取り皿いらぬ、おかずを盛る皿もいらぬ
30枚以上あつた皿洗いはたったの6枚、お味噌汁があつても12枚と大幅に削減。
皿洗いも1枚くらいだったら5歳の子供にだつて出来ちゃいます。
年齢に合わせてそれぞれ盛り付けられるので
「お前トンカツ何切れ食つた？」とか言う子供たち同士の争いがなく

なる。
おかずをとる時にこぼしたのなんのだ
いちいち子供を怒らなくて済む。争いがなくなつたり
怒らないで済むと
みんなニコニコ楽しく食べられる。たまにお茶碗使うと新鮮でこれまた楽しい。
子供たちはもちろん、否定的だった家内もこれほど良いとは思つてなかつたようで、思い込みつて怖いなど反省しきり。
さて
何が言いたかつたと言いますと僕らの世代は何かと言うと中学生らしく、高校生らしく大人になつたら大人らしく日本人らしくと教えられて丸坊主にしたり背筋伸ばしたりして頑張つてきたわけですが
もうそんなことを真面目にやってるだけではどうにも解決できない問題が山積みの大変な世の中になつてしまいました。
残念ながら時計を逆回しにしても昔には戻れません。
日本人らしくなんていう狭い価値観や、古いとか新しいとかいう単純な物差しに囚われず
ちっぽけな日常からも

柔軟に物事を考え
問題を楽しく解決する習慣を身につけるべきなのです。
日本人である前に人間で
人間である前に動物で
動物である前に生き物でと
ぐいぐい視野を広げて柔らかく考えていくと、今まで一つだけだと思つていた正解が、いろんなところにいくつもあることに気がついて
そうなる、わざわざ文科省に難しいこと言われなくとも
文化の多様性なんてことは容易に理解できるし尊重できるいろんなことに対して寛容になれるというものです。
打開笑門福自来 Fortune comes in by a merry gate. 笑う門には福来る。
問題解決に笑つて取り組む
限界集落での暮らしや子育ては、いろんなことを教えてくれるのです。



材料を作るところから料理の始まり